第二章
町家と町なみ調査の概要

長崎県公安委員会

上　平成12年10月調査風景　下　左から長谷部、望月、星野フサエさん、元井、江島

1　調査のきっかけ

島原市の武家屋敷の町なみが、よく残っていることは以前に一度見学したことがあったので知っていた。しかし、市内の庶民住宅である農家や町家がどのようなものであるかは知るよしもなかった。市の歴史的建造物や湧水などを撮影していた建築写真家三沢博昭さんから、島原には武家屋敷だけでなく、町家に質の高いものが多くある、一度調査してみないかという話があった。1999年の建築修復学会の大会は、夏8月に長崎県五島列島で開催された。このときも島原の民家の話に華が咲いた。学生たちとも話して、その後9月末に島原を訪れた。このときに珍しい造りの民家があると、すなわち、17世紀に始まるキリシタン弾圧の痕跡を伝えているのであろうという民家の存在である。このことを三沢さんから示唆された。つまり、接客座敷から表の道路に向かって仏間を張りだして目立つように造っている民家である。これには興味がつのった。現地を実見しこの地域の町家調査を実施する気持ちになったのである。

そこでどのように資金を調達し、どんな組織を組んで調査を実施するか思案した。結果として、島原市から財団法人日本ナショナルトラストの観光資源保護調査に応募してもらうこととした。幸いにしてナショナルトラストの調査対象として採用された。現地調査をどのような調査員ですすめるか。このことは、すでに五島列島での建築修復学会の大会にいたときから考えていた。長岡造形大学の卒業生と卒業研究にあたる学生たちを動員しよう。

2　調査の目的

調査の目的は、島原市の町家を、①学術（民家史）、②文化遺産・文化財、③まちづくりの資源に活かす立場から位置づけることである。

このためには島原市の町家の実態を学術上から知る必要がある。まず、島原市の町家に関する文献を収集した。しかし、民家史・文化財の立場からの調査研究のリポートは少ない。そこでまずは、古い民家が集中している中心市街地の町家の実測と編年研究をすることとした。つまり、民家の建築年代を測る物差を作製するのである。九州各地の民家で編年研究がなされているところはほとんどない。基礎的な調査から手掛けることとしたのである。

調査研究を、ただそれだけで終わらせたくない。文化遺産・文化財としての位置づけや価値評価をして、要件を満たす物件は保存を図りたい。建造物に関わる文化財としては、指定文化財制度、登録文化財制度がある。また、町なみは伝統的建造物群保存地区、つまり町なみ保存の制度もある。この制度を活用して出来るだけ歴史的な民家や町なみを保存する方向で、まちづくりの資産として活用したい。

今回の調査研究の結果を、市側もわれわれも歴史と文化を生かしたまちづくりに活用したいと考えていた。島原街道の白土町・加美町・桜町の町なみは、建造物の保存を考慮したまちづくりを進めることも考えてよい。商業活動が盛んな上の町の町なみは、別な方法を考えた方がよいだろうか。

上記のようなことを考えながら調査にあたった。ただ、この項の最初にあげた目的の項目は大きな課題を含んでいるので、今回の調査で完了するようなものではない。結果として完了をみたのは一部に過ぎない。

3　従来の調査研究

島原市の民家調査、まちづくりに関わる報告など、これまでの実施したもののうち代表的とみられるものをあげる。

A　長崎県緊急民家調査

島原市の民家について、昭和49年(1974)刊行の長崎県教育委員会編「長崎県の民家（後編）長崎県緊急民家調査報告書」(以下、報告書と記す）が参考になる。この緊急民家調査は文化庁の助成を受けて長崎県が昭和42年(1967)に実施したものである。この調査は重要文化財に指定する民家の候補を探すことを目的にしておこなわれた。ときの主任調査員は、当時大坂工業大学助教授青山賢信氏である。

ここで調査対象にあがっている島原市の民家は合計132棟である。このうち予備調査にあがってきたもの

108棟、第１次調査にあがってきたもの23棟である。第１次調査のうち５棟が第２次調査の対象となり、最終の第３次調査に残ったのは１棟であった。これらのうち上記報告書に11棟が掲載されている。

ところで、県全体で調査対象にあがってきた全件数は721棟、予備調査557棟、第１次調査222棟、第２次調査対象64棟、第３次調査に残ったものは38棟、報告書に掲載されたもの79棟である。数字をみると予備調査、第１次調査にあげられた棟数は、島原市が県下市町村のなかでもっとも多い。また、第２次調査対象の５棟も県下でもっとも多く、他の市町村はみな４棟以下である。

上記した報告書に載る島原市の11棟は次の住宅である。なお、この調査では下級武士住宅を民家に含めて扱っている。

No.	氏　名	所　在	種別	建築年（根拠）
1	山崎 重裕家	白土町1091	町家	弘化３年(棟札/普請帳)
2	羽太 昌久家	加美町1013	町家	19世紀
3	樋口 正規家	加美町1094	町家	19世紀中頃
4	内田 又四郎家	東本町	町家	19世紀中頃
5	大岡 秀久家	新馬場 953	武士住宅	100年前頃
6	島田 ヒサ家	下ノ丁1971	武士住宅	105年前（口伝）
7	山本 秀武家	下ノ丁1995	武士住宅	文化13年
8	山本 トキ家	中ノ丁2056	武士住宅	110年前（口伝）
9	北野　晃家	中ノ丁2071	武士住宅	250年前
10	大津 嘉納家	中ノ丁2086	武士住宅	120年前頃
11	上田 久松家	古　丁2322	武士住宅	120年前

１山崎家、３樋口家の２棟は今回調査対象としている

これら11棟の内容は、町家４軒、武士住宅７軒、農家はゼロである。屋根葺き材は、町家はみな瓦葺き、武士住宅はみな茅葺きである。建築年代は250年前とする１棟を除いてどれも19世紀である。なお、上記の何年前の表示は調査時1967年から数えている。予備調査で上がってきた108棟の物件には農家、町家、武家住宅、その他が含まれている。それらはみな家屋台帳を根拠にしたもので、建ててから100年以上前のものを書き上げている。調査当時の昭和42年(1967)はちょうど明治100年にあたるので、書き上げられた物件は江戸時代の建築と判断された家屋である。これらの建築年代の実際を知るには建物にあたるなどの調査を必要とするが、島原市には県下でも古い家が多く、当時の担当者が熱心にリストアップしたことが知られる。

報告書に載る調査対象物件に農家が１件もあがっていないことから判断すると、調査当時の頃は、島原では武家住宅と町家が特別に注目されていたことがわかる。なお、町家４棟のうち３棟は今回の調査地区に所在する。

島原市の町家について主任調査員の青山賢信氏は、報告書のなかで次のように記述している。ただ、記述は島原市の町家としてまとまっているのではなく各所に散見しているので、これを拾いだしてみる。

町家の形式　　平入りと妻入りの両方があるが、妻入りは県下では島原市内に数棟が残っているにすぎなかった。

間取り　　片側に通り庭をとり、それに沿って部屋を表から裏に向って前後に配する。部屋の列は、小規模の家では１列、大規模の家では２列、３列になる。特に島原市に残る大規模な町家では、前後２室左右３列に並べる六間取りで、表側に２間におよぶ下屋をおろして土間を広げると同時にその一部に下店を設ける形式が取られている。

屋　根　　すべて瓦葺きで、切妻造りが多いが島原では寄棟造りがみられる。

構　造　　つし二階あるいは二階座敷を設けるので、下階の指鴨居は上へ上げて胴差となり、大引天井を張る。二階を造る部分では登梁を用いる。土間上は二階を造らない時は和小屋組をみせるが、幕末には土間上にも二階を造るようになって登梁を用いる。

B　島原市地域住宅事業と中心市街地総合再生計画・街なみ環境整備事業

地域住宅事業（HOPE計画）は、地域に根ざした住まい・まちづくりを進めるために昭和58年(1983)にスタートしたもので、島原市HOPE計画は昭和59年(1984)に実施された。また、雲仙普賢岳の平成の大噴火の直後、市民の気持ちが沈みがちな平成５年(1993)に中心市街地総合再生計画・街なみ環境整備事業がとりあげられた。これらの事業は島原市のまちづくりに大きな影響を及ぼしている。

この調査から発展的にいくつかの関連調査がおこなわれ、また、組織ができた。そのなかに今回、調査対象とした島原街道筋の地区もとりあげられている。平成７年に「森岳地区街づくり協定研究会」「鯉の泳ぐ町地区協定研究会」などが発足した。その成果として、

同８年に「鯉の泳ぐ町地区協定書」、12年に「七万石坂街づくり協定書」、「上の町街づくり協定書」ができ、島原市街なみ環境整備事業補助金交付制度が開始した。

まちづくりシンポジウム、住宅フェアなど現在も続いている。これらは民家やまちなみを建築史や文化財としての立場から調査研究し、まちづくりに直接活かすものではないが、その活動は今に生きており大変に役立っている。

4　調査の組織

財団法人日本ナショナルトラストの事業として、平成13年度観光資源保護調査「キリシタン信仰の痕跡を残す島原の町家」調査委員会が組織された。調査委員は次にあげる14人である。なお、事務局は島原市教育委員会と日本ナショナルトラストが担当する。

委員　○宮澤　智士（長岡造形大学教授）
林　一馬（長崎総合科学大学教授）
鮫島　和夫（長崎総合科学大学助教授）
木田　正巳（島原市文化財保護審議会）
本田　金重（長崎県建築士会島原支部）
松坂　昌應（森岳まちづくりの会）
北村　正保（まちづくり推進協議会）
左海　冬彦（長崎県土木部建築課長）
矢部　文俊（長崎県島原振興局建築課長）
林田　誠治（島原市建築課長）
島崎　功（島原市都市整備課長）
倉重　貴一（島原市商工観光課長）
坂本　正博（島原市社会教育課長）
米山　淳一（財団法人日本ナショナルトラスト事業課長）
事務局　土橋　啓介（島原市社会教育課主事）
山本　玲子（財団法人日本ナショナルトラスト事業課調査係長）
○印　委員長

現地調査団員は次のメンバーによる。
主任　宮澤　智士　長岡造形大学教授
調査委員会委員
団員　元井　文　長岡造形大学授業研究補佐職員
調査団主任代理
江島　祐輔　旧中筋家住宅修理工事事務所
長谷部圭紅　長岡造形大学環境デザイン学科４年生
望月　美里　長岡造形大学環境デザイン学科４年生

5　調査日誌

今回の調査は、2000年９月に現地を訪れて現地の感触をつかみ、どのような調査方法がよいか検討する準備を始めた。調査陣の都合や現地での行事、気候条件等を考慮して、第一回の調査を2000年10月11月、第二回の現地調査も2001年１月におこない、さらに第三回の調査を2001年３月に開始し、その後、同年８月に第四回の現地調査を実施した。これら４回の調査の日程、調査物件、その内容に関しては次項でのべる。

これらの現地調査と前後するが、2001年５月７日に第一回の調査委員会が霊丘公民館で開かれ、３月までに実施した三回の調査概要を報告するとともに、今後の調査研究について、各委員からご意見をたまわった。第２回調査委員会は10月26日に森岳公民館で開かれた。この委員会では、これまでの調査研究の内容、特に町家の編年に関して詳しく報告をした。また、この日に地元の方々に調査結果を報告する報告会をもった。森岳まちづくり会の主催、会場は上の町の宮崎商店焼酎蔵（明治39年建築）二階、参加は約70名であった。

調査、報告会にあたって市民の方々の絶大なご協力があった。ここに記して感謝の意を表したい。

現地調査日誌
第1回　島原街道筋町なみ･町家調査
日　程　平成12年10月27日～11月１日
（長岡出発10月26日～到着11月２日）
調査員　元井文　長谷部圭紅　望月美里　江島祐輔
調　査　調査地区の全建物の外観概要調査
（調査台帳記録、写真撮影）
まとめ　調査員が島原を訪れるのはこれが始めてであった。まずは土地勘を身に付けるため島原街道を中心に歩いてまわり、同時に調査地区を決定した。伝統的建物が集中する島原街道の約1.5㎞を本調査の対象

地区とする。

次に調査地区の町なみ構成要素を把握するために、街道に面する全建物の外観概要調査をおこなう。調査は、建物全件に調査番号を付けながら（以下、住宅名前に付く数字は調査台帳番号とする）、伝統的であるか、そうでないかの分類をし、伝統的なものにおいては建物概要を記録する。全件の写真記録をとる。

今回は外観観察のみの調査であったため建物内部の間取りを考慮できなかった。既往調査により、93小松屋（弘化３）、91宮崎康久家住宅（築80年）、17西川俊治家住宅（明治40年）、155保里川茂治家住宅（築150年）と記されていたので、これらを一応参考にした。

比較検討した結果、年代を示す11の指標候補を導きだすことができた。また、主屋正面の形式によって町家を3つのタイプに分類することができ、これも指標になる可能性が高いと考える。（指標、タイプ分けについては第３章で詳しく述べる。）

今後は、実測調査をおこない平面・断面図等を作成し、間取りや構造による考察を加え、編年研究を深める必要がある。

第２回　島原街道筋町なみ・町家調査

日　程　　平成13年１月28日～１月30日
（長岡出発１月28日～到着１月30日）

調査員　　宮澤智士　元井文

調　査　　町家内部調査３軒
（155保里川茂治家、91宮崎康久家、17西川俊治家）

まとめ　　３軒の町家の内部調査をおこない、このうち２軒の町家が棟札を所有しており建築年代が判明した。（建築年代については第３章で詳しく述べる。）また、１棟の主屋建物で、後の改造により上手半部と下手半部で建築年代の異なる事例があった。この建物では小屋組の形式が上手と下手で異なり、同一建物上で年代の指標を検討することができた。半部それぞれが年代による特徴をあらわしているため、場合によっては半部を１棟として考察することが必要になる。なお、３軒の町家において共通する要素がいくつかあったが、島原の特徴として考えるには、さらに調査物件を増やす必要がある。

また今回の調査では、一般的な主屋の規模と様子をうかがうことができ、今後の調査計画を具体的にした。

第３回　島原街道筋町なみ・町家調査

日　程　　平成13年３月15日～３月26日
（長岡出発３月13日～到着３月29日）

調査員　　宮澤智士　元井文　長谷部圭紅　望月美里　江島祐輔

調　査　　町家実測調査12軒（91宮崎康久家、17西川俊治家、78宮崎商店、140ギャラリー絃燈舎、20本田亘家、51中山公家、99本田智家、155保里川茂治家、72中野金物店、141清水強家、118樋口正郎家、93小松屋）

まとめ　　調査地区内で比較的大きな町家を選びだし、この中で12軒の町家を実測することができた。町家１軒につき、一階平面図、二階平面図、梁間断面図、配置図、必要であれば痕跡図や復原図なども作成した。調査した12軒のうち７軒の町家が棟札や普請帳を残しており建築年代を明らかにすることができた。記された建築年代と現状建物を比較し、特に年代が誤っているといえる根拠がなかったため、記録は一応正しいものとした。建築年代の明らかな町家は、建築史の基礎的研究である編年考察を進めるうえで重要な手がかりとなる。また、１棟の主屋の上手半部と下手半部で年代の異なる事例が３軒あった。

内部調査の結果、島原における町家の特徴が幾つかみえてきた。以下に述べる。

- 上手を北方向に向ける。本田智家以外全ての家が北を上手にしている。
- 床の間と床脇の割合が等分ではなく、床の間がやや広くなっている。
- 仏間は表側に配置する。年代が下ると裏側や二階へ移行する。
- 寸法は内法制、畳は京間畳で大きい。
- 大黒柱は土間と床上の境に２本あり、他の柱よりやや太い。家によっては２本以上の例もある。
- 二階への階段が主屋のほぼ中央に配置される。
- 土間境裏側の部屋が土間方向へ半間から１間張り出す。したがって表の土間間口がここで狭くなる。階段の位置が影響しているのか。
- 二階は一室の物置とし、天井は張らず背が低い。新しい町家は二階に座敷を設ける。
- 小屋組の梁の架け方には、水平梁と登梁、頂部が交差する登梁がある。
- 二階の窓枠に古い形式のものがあった。窓の大きさで編年は可能なのか。

・本田亘家(明治14年)は和釘(角釘)、中山公家上手半部(明治18年)は洋釘(丸釘)の使用が確認できた。島原における洋釘の普及がこの時期であるといえる。
・前回の町なみ調査でタイプ分けした形式は、AからB、BからCへ変遷することがわかった。Aタイプの、主屋正面下手に深い下屋をつけ上手に突出部(ない場合もある)、前庭、門、塀などを構える形式が古く、島原の町家の特徴でもある。
・しめなわが一年中飾られている。

第4回　島原街道筋町なみ･町家調査
日　程　　平成13年7月30日～8月15日
（長岡出発7月28日～到着8月19日）
調査員　　元井文　長谷部圭紅　望月美里　江島祐輔
調　査　　町家実測調査5軒（140ギャラリー絃燈舎、120星野國盛家、 67猪原金物店、番外小鉢貴信家、93小松屋）と市内全域歴史的建物調査
まとめ　　今回の調査は島原市内全体を把握するために、市内全域歴史的建物調査に重点をおいた。調査地区以外を見て回るのは今回が初めてである。主屋の前面上手に部屋を突出させる町家に注目していたが、突出部のある建物は多いわけではなく、島原街道筋特有の要素、もしくは年代が遡る要素として考えられるのか。なお、突出させた部屋が仏間であるかどうかは外観観察調査のみであったため確認はできなかった。この調査で取り上げた建物は（登録文化財を目的に）築50年以上経過したものに限定したが、数が莫大であったため、この中でもさらに特徴的なものに絞り込んだ。リストアップした100件の中、住宅が半分以上を占めており、そのほか公共建築、土木構造物、寺社などがある。洋風あるいは一部洋風の建物は全体の1割強、茅葺屋根の建物は1割弱であった。今回の調査は、島原全域を悉皆調査する十分な時間が取れなかったため、今回取り上げた物件が全てではない。多くの財産を持つ島原において、さらに調査を重ねることで、登録文化財候補物件の数を増やすことは容易であろう。